

ごあいさつ

2017年、菊池川流域（山鹿市、菊池市、和水町、玉名市）の2千年にわたる米作り文化が、日本遺産に認定されました。

玉名では、弥生時代から米作りが始まり、現在に至るまで盛んに行われています。その米作りには様々な作業があります。例えば、田を耕す、稲の苗を植える、草を取り除く、稲を刈るなどの作業です。これらの作業がより効率よく行えるように、人々は昔から様々な農具を発明し作りだしてきました。

農具は、稲刈り機のように時代とともに進化していくものが多いのですが、中には鋤のように2000年近く形が変わらないものもあります。また田の水を管理するために、弥生時代にはたくさんの杭を使って頑丈な畔あぜを作っていたことが近年の発掘調査で分かりました。その他にも、稲が無事に育つことを願う祭りや、収穫を祝う祭りも各地で行われてきました。近年では、色の違う稲を利用して田に絵を描く、「田んぼアート」も行われています。

今回の展示では、古代から現代の玉名の人々がどの様に米作りに励み、関わってきたのかを、発掘された弥生～古墳時代の農具や杭などの水田構築物、昭和30年代まで使用されていた農具、祭りに使用された衣装や道具、写真を通してご紹介します。農具では、時代を経て変化したところや変化していないところにも注目して、各時代の人々が工夫したところをぜひ見つけてみてください。

また展示室には、復元した貫頭衣かんとうい（弥生時代の服）を着て、石包丁で稲穂を刈る体験や、江戸時代の米俵の重さが実感できる体験コーナーを設けています。楽しみながら米作りの歴史に触れてみてください。

最後になりますが、本企画展にご協力賜りました方々に、心より御礼を申し上げます。

令和2年1月25日
玉名市立歴史博物館ころろピア

凡例・謝辞

1. 本誌は、玉名市立歴史博物館ころろびあ令和元年度企画展「玉名の米作り～二千年の歴史～」の展示概要として作成した。
2. 本企画展は、館長 牧野吉秀のもと、石松智子が担当し、当館の村上晶子、坂本尚文、浦田大奨、赤堀千恵美、牛島昌代、田中寛美、佐藤夕香が協力した。
3. 本誌の作成は石松が行った。
4. 本企画展では下記の方々にご指導・ご協力を賜りました。記して厚く御礼を申し上げます。（五十音順・敬称略）
池田保明 池田末代 石松 直 宇田眞将 江見恵留 大河原由美 大倉千寿 大山伸一 沖 良一
菊池直樹 古閑敬士 近藤トヨ子 近藤 貢 坂本鉄夫 末永 崇 田熊秀幸 竹田宏司 田中康雄
齋父雅史 徳山重人 中村安宏 兵谷有利 古森政次 前川 勝
熊本県東北広域本部玉名地域振興局農林部農業普及・振興課 熊本県立北稜高等学校 玉名市神楽連絡協議会
玉名市教育委員会文化課文化財係 玉名市ふるさとセールス課 玉名市立歴史博物館ころろピア友の会

はじめに

みなさんがいつも食べているお米は、種から大きく育て、白いお米になるまでの間に、いろんな名前と呼ばれています。



たね もみ
種 = 「籾」



の なえ
10cmくらいに伸びたもの = 「苗」



おお そだ いね
大きく育ったもの = 「稲」



いね と み もみ
稲から取った実 = 「籾」
よ つぎ とし たね
(良いものは次の年の種にする)



もみ と げんまい
籾からカラを取ったもの = 「玄米」



げんまい と ぱくまい
玄米からヌカを取ったもの = 「白米」

そして、この白いお米にするまでの間には、昔からたくさんの農具を使って作業をしてきました。どれも大変な作業なので、昔の人は少しでも楽になるようにいろんな工夫をしてきました。これから順番に見ていきましょう。



①種をまく、苗を育てる

種は、先に「苗代」という別のところで、少し大きくなるまで大切に育てておきます。これは、田んぼの中で雑草や病気に負けないようにするためです。



苗を運ぶための農具【昭和時代（約60年前）】



土を耕す、ならすための農具【古墳時代（約1400～1700年前、柳町遺跡）】

②土を耕す

土を掘って起こすことを「耕す」といいます。米作りでは「田起こし」といいます。硬くなった土を柔らかくして土に空気（酸素）を入れたり、栄養のある土を混ぜたりするためです。そうすると、苗の根が伸びやすくなり、大きく成長します。

耕したあとは、田んぼに水を入れて、土をさらに細かく砕いて柔らかくします。これを「代かき」といいます。

最後に田んぼを平らにならしめます。農具は、最初は人の力だけで使っていましたが、だんだん牛や馬の力を借りるようになりました。今は機械が自動でしてくれます。



土を耕すための農具【昭和時代（約60年前）】

③苗を植える

いよいよ田んぼに苗を植えます。昔は人の手で植えていましたが、今は機械が自動で植えてくれます。



苗を植えるための農具と機械【昭和時代（約60年前）、現代（今）】

た みず ざっそう
④ 田んぼの水と雑草

★ 問題1

稲は、水を入れた田んぼで育ちます。水がもれないようにするためには、田んぼのまわりに土で仕切りをつくって囲みます。この仕切りを「畔」といいます。大昔の人は、畔がすぐ壊れないようにするために、どんな工夫をしていたのでしょうか？



★ 問題2

田んぼは、ずっと水を入れたままでもいけません。夏には一度水を抜いて土を乾かさなければなりません。これは、新しい空気（酸素）を土の中に送って、稲の根を元気にさせたりするためです。でも、ぜんぜん水が抜けない田んぼもありました。

そこで昔の人は、田んぼから水を抜くための発明をしました。それは「暗渠」といいますが、どのような発明だったのでしょうか？

★ 答え1

- 弥生時代（約2300～2000年前）の玉名の人びとは、畔の横にたくさんの杭を打って畔が崩れないようにしていました（両迫間日渡遺跡）。
- 奈良時代から平安時代（約1200年前）の玉名の人びとは、土の中にたくさんの木の枝を束ねて敷いて、頑丈な畔を造っていました（柳町遺跡）。

★ 答え2

「暗渠」は、田んぼの土の中に造られた水路のことです。田んぼの土を乾かしたい時は、土の中で水を集めて流すことができます。また水を入れることもできます。江戸時代～大正時代頃（約200～100年前）の玉名では、掘った溝の中に竹や土管、木の枝を重ねて入れて、暗渠を造っていました。（玉名平野遺跡群）



★問題3

た ゑんぼには ざっそう も いっしょ に 生えて きます。
ざっそう は 土の 栄養 を 取られて しまう ので、 何回
も 取りの ぞか ない といけ ません。 と ても 大 変
な 作 業 でした。 少 し ず こ とも 楽 になる よう に、 ど ん
な 農 具 が 発 明 さ れ た だ しょう か？



★答え3

・ガンツメ

しょうわじだい やく ねんまえ
昭和時代（約90年前）

いね おお 稲が 大 くなる ころに、 ざっそう と 雑草 を 取る ため に つか います。 つめ おお 爪が 大 さいので、 くさ と 草を 取 りながら 土を 耕 す こと も でき、 つち しんせん くうき さんそ 土に 新 鮮 な 空 気（酸 素）を 送 ったり する こと が でき ます。 昔 の 人 が 田んぼ を 歩 く カニの 爪 を 見 て ひらめ いた ぞう だ。 なつ あつ とき 夏 の 暑 い 時 に、 じめん 地 面 に は い つ く ば っ て 何 回 も 草 を 取 ら ない といけ ない ので、 と ても 大 変 な 作 業 でした。

・田打車

しょうわじだい やく ねんまえ
昭和時代（約60年前）

「押しガンツメ」ともいいます。 ま っ す ぐ に 押 して 歩くと、 爪が 回 転 して 草 を 取 る こと が でき、 土を 耕 す こと も でき ます。 立 っ た ま ま 作 業 が でき る ので、 ガン ツメ より スピード が 5 倍 ぐ ら い 上 が っ た ぞう だ。 たうちぐるま 田 打 車 を 使 い や す く する ため に、 なえ 苗 を ま っ す ぐ き れ い に 植 え る よう に な り ま した。 熊本 県 だ け で は 明 治 30 年 代（約 120 年 前）に た く さ ん の 人 が 使 い 始 め ま した。 い ま じょそうざい 除 草 剤（草 が 生 え ない よう に する ため の 薬）や 除 草 機（自 動 で 草 を 取 る 機 械）を 使 う よう に な り ま した。



⑤ 稲を刈る

ようやく稲が実って、稲を刈って
いきます。玉名では大昔の稲刈り
の農具がいくつも発見されていま
す。はじめは石で作っていましたが
(石包丁)、だんだん鉄で作られる
ようになっていきます(摘鎌・鎌)。
昭和時代には、立ったまま稲の
根元が刈り取れる、「稲刈り機」が
登場しています。今は「コンバイン」
が自動で稲を刈り取り、次の
作業の籾を外す脱穀までしてくれ
ます。



稲を刈るための農具
【弥生時代(約2200~1800年前、木船西遺跡)】



稲を刈るための農具、機械
【昭和時代(約60年前)、現代(今)】



⑥ 乾かす、籾をはずす

刈った稲は、水分が多いので、米
を長く保存したり、次の作業がしや
すいようにカラカラに乾かします。
昔は天気の良い日に、田んぼで稲
を束ねて干していましたが。今は
乾燥機を使って乾かします。
次は稲から籾を外します。これを
「脱穀」といいます。外した籾は、
まだ水分が多いので、敷物の上に広
げてもう一度乾かします。



籾を外す、乾かすための農具【昭和時代(約60年前)】



⑦玄米にする

臼などを使って乾いた粃をすりあわせると、殻が外れて中から玄米が出てきます。オロシ、唐箕、万石などを使って殻やくずを取り除き、玄米だけになるように分けます。今は機械が自動でしてくれます。玄米から糠を取り除くと、白米になりますが、玄米のまま保存する方が長持ちします。



玄米にする、分けるための農具【昭和時代（約60年前）】

⑧はかる、入れる

決められた量の玄米を、俵や袋に入れて運べるようにします。



玄米などをはかる、入れるための農具【昭和時代（約60年前）】

⑨運ぶ

昔は重いものを運ぶ時は、馬や牛の力を借りていました。そのため馬や牛も家族のように大事にしていました。人がものを運ぶときは、棒にぶら下げてかついでいました。



米などを運ぶための農具【古墳時代（約1700年前、赤色の部分）、昭和時代（約60年前）】



わらを利用するための農具【古墳時代（約1700年前、赤色の部分）、昭和時代（約60年前）】

⑩わらを利用する

稲から粃を外した後に残る、茎の部分を「わら」といいます。わらは、捨てずに色々なものを作っていました。稲は捨てるところがありませんでした。

いの かんしゃ
①祈る、感謝する

たまな むかし こめづく
玉名では昔から米作りをしながら、
おまつりもしていました。それは、いね
などが無事に育つように神さまにお祈り
をしたり、おいしいお米などがたくさ
んとれたら、神さまにお礼をして、つぎ
の年もたくさんとれるようにお祈りをして
いたのです。今でも続くまつりがたく
さんあります。



りょうはざま ひ わたしい せき こふんじだい
両迫間日渡遺跡～古墳時代のまつり～



おおのしもやっこおど あめ ふ
大野下 奴踊り～雨を降らせるまつり～



おおはまとしまぐすみよしじんしゃ ねんきさい ねん いちど
大浜外嶋宮住吉神社 年季祭～10年に一度のまつり～



しじゅうくいけじんしゃ しゅうきだいさい はなび
四十九池神社 秋季大祭～花火のまつり～



ばいりんてんまんぐう れいたいさい やぶさめ
梅林天満宮 例大祭～流鏝馬のまつり～



ひごかくら あおきちく つか いしょう どうぐ
肥後神楽 (青木地区で使われていた衣装や道具)

⑫見て楽しむ田んぼ

いま、田んぼでさまざまな色の稲を育てて、絵を描くことができます。これを「田んぼアート」といいます。玉名では、今は使われなくなった田んぼを利用して、2013年から毎年、北稜高校生が中心になって取り組んでいます。場所は新玉名駅の近くの田んぼです。7月下旬～9月の3週目ごろには、駅のホームからきれいにみることができます。



田んぼアートと作業の様子

体験コーナー



「弥生時代の服を着てみよう！」



「江戸時代の俵を持ってみよう！」 「石包丁で稲を刈ってみよう！」

主な参考・引用文献

- 熊本日日新聞社編集局 1977『農魂 熊本の農具』熊本日日新聞社
- 牛島盛光 1981『熊本の民具』熊本の風土とところシリーズ 第2集 24 熊本日日新聞社
- 玉名市史編集委員会 1993『玉名市史』資料篇3 自然 民俗 玉名市
- 荒木隆宏ほか 2009『両迫間日渡遺跡』玉名市文化財調査報告第19集 玉名市教育委員会
- 田中康雄 2009『柳町遺跡』玉名市文化財調査報告第20集 玉名市教育委員会
- 中村安宏ほか 2017『木船西遺跡』玉名市文化財調査報告第34集 玉名市教育委員会
- 蟹父雅史ほか 2019『玉名市内遺跡調査報告書11』玉名市文化財調査報告第41集 玉名市教育委員会
- 高谷和生 2001『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第200集 熊本県教育庁文化課
- 坂田和弘 2004『柳町遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第218集 熊本県教育委員会

令和元年度企画展「玉名の米作り～二千年の歴史～」

開催期間 2020年1月25日～4月12日

編集・発行 玉名市立歴史博物館ころこピア

〒865-0016 熊本県玉名市岩崎117 TEL0968-74-3989